雌阿寒岳の火山活動解説資料

札　幌　管　区　気　象　台
地域火山監視・警報センター

＜噴火警戒レベルを２（火口周辺規制）から１（活火山であることに留意）に引下げ＞
ポンマチネシリ火口付近では、2025 年９月中旬に火山性地震の増加や火山性微動の発生、同火口方向上がりの傾斜変動、ポンマチネシリ 96-1 火口の噴煙活動の活発化等が認められました。
火山活動が活発に推移する中、2025 年９月、10 月、2026 年３月にごく小規模な噴火が発生しましたが、以降、噴火は観測されていません。2026 年５月以降、傾斜変動は火口方向下がりに転じ、また噴煙量にも減少がみられるなど、火山活動が低下傾向に転じました。６月以降は地震活動にも低下傾向がみられるようになり、10 月以降は低調に経過しています。

これらのことから、ポンマチネシリ火口から約500mの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（４日）10 時 00 分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを２（火口周辺規制）から１（活火山であることに留意）に引き下げました。

【防災上の警戒事項等】
活火山であることから、火口内に影響する程度の噴出現象が突発的に発生する可能性がありますので、火口内や近傍では火山ガスや火山灰噴出に注意してください。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図１、図２-①、図３、図５-①②⑤、図７-①～⑥）

ポンマチネシリ96-1火口では、2025年９月、10月及び2026年３月にごく小規模な噴火が発生しましたが、３月16日以降、噴火は観測されていません。噴煙活動は、2025年９月12日に噴煙量が増加して以降、活発に推移していましたが、５月頃から噴煙量がやや減少するなど、緩やかに低下がみられています。また、９月１日に実施した現地調査では、2025年９月15日の観測で新たに認められた火口底の活発な噴気はみられなくなっており、噴気活動の衰退が認められました。

なお、その他の各火口（赤沼火口、北西斜面06噴気孔列、中マチネシリ火口）の噴気活動は、引き続き低調に推移しています。

・火山ガスの状況（図２-②）

気象庁、北海道大学及び機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・防災科学技術研究所）が雌阿寒岳山麓で実施した現地調査によると、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2026 年２月から４月は１日あたり 300～400 トンでしたが、６月以降は１日あたり 100 トン未満～200 トンと減少しています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・国立研究開発法人防災科学技術研究所）のデータを利用して作成しています。
資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図10mメッシュ（火山標高）』、『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

・地震及び微動の発生状況（図２-④⑤、図４、図５-④⑦、図７-⑦⑧）

ポンマチネシリ火口付近の地震活動は、2025年９月に活発となり、それ以降も2026年５月中旬に回数が増加するなど時折活発化が認められましたが、６月頃から低下傾向が認められ、10月以降は低調に経過しています。火山性微動は、８月９日以降、観測されていません。

・地殻変動の状況（図２-③⑥、図５-③⑥⑧、図６、図８）

ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北２観測点では、2025年９月12日に浅部膨張を示す火口方向が上がる変化がみられて以降、緩やかな火口方向上がりの変化が続きましたが、５月以降、火口方向下がりの変化に転じており、その後は特段の変化は認められていません。

GNSS連続観測では、主に東側山麓の観測点による基線で2025年８月末頃から2026年４月頃にかけて山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められていましたが、以降は特段の変化は認められていません。

○活動評価

2025年９月中旬にポンマチネシリ火口付近で高まった火山活動は、その後も活発に推移し、2025年９月、10月、2026年３月にごく小規模な噴火が発生しましたが、以降、噴火は観測されていません。2026年５月頃以降、噴煙活動や地殻変動に火山活動の低下傾向を示すと考えられる変化が認められるようになりました。６月以降は地震活動にも低下傾向が認められるようになり、10月以降は低調に経過しています。

これらのことから、ポンマチネシリ火口周辺（ポンマチネシリ火口から約500ｍの範囲）に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったとみられます。

活火山であることから、今後も火口内に影響する程度の噴出現象が突発的に発生する可能性がありますので、火口内やその近傍では火山ガス、火山灰の噴出に注意が必要です。

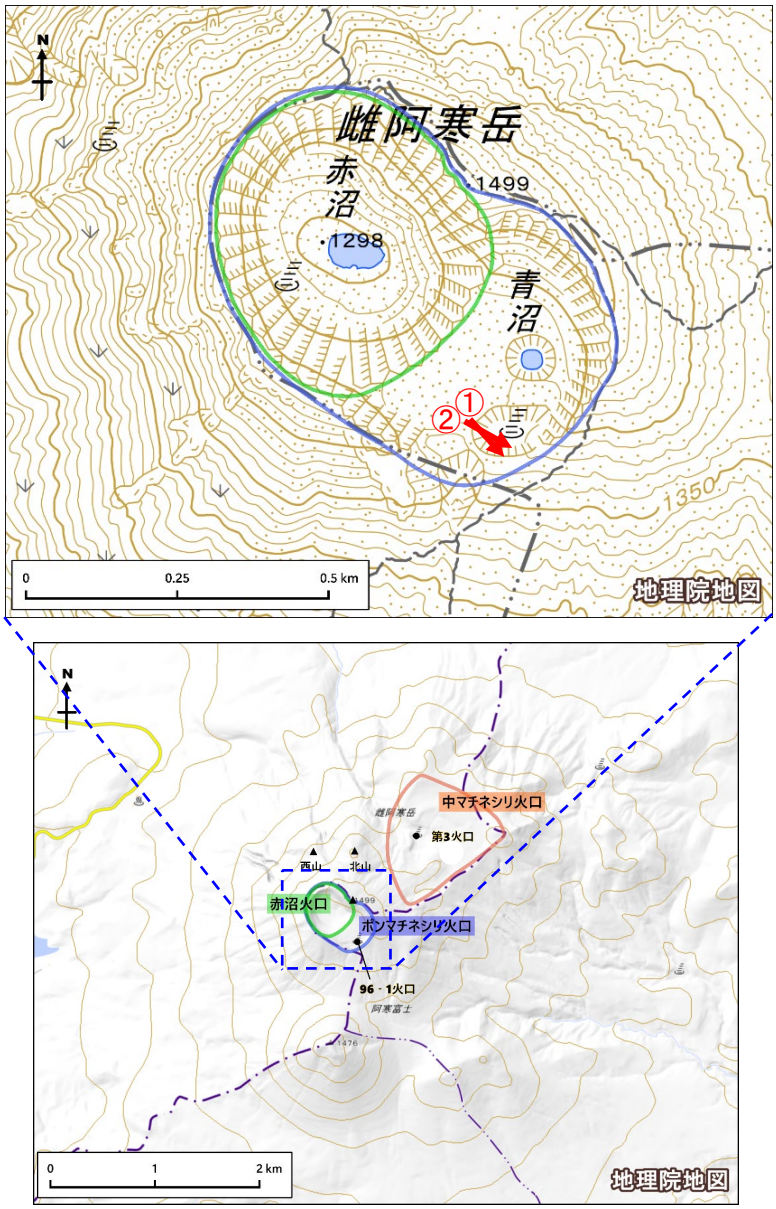


図１　雌阿寒岳　火口及び噴気孔の位置図、写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）
各火口の火口縁は、概ねの範囲を示すものです。

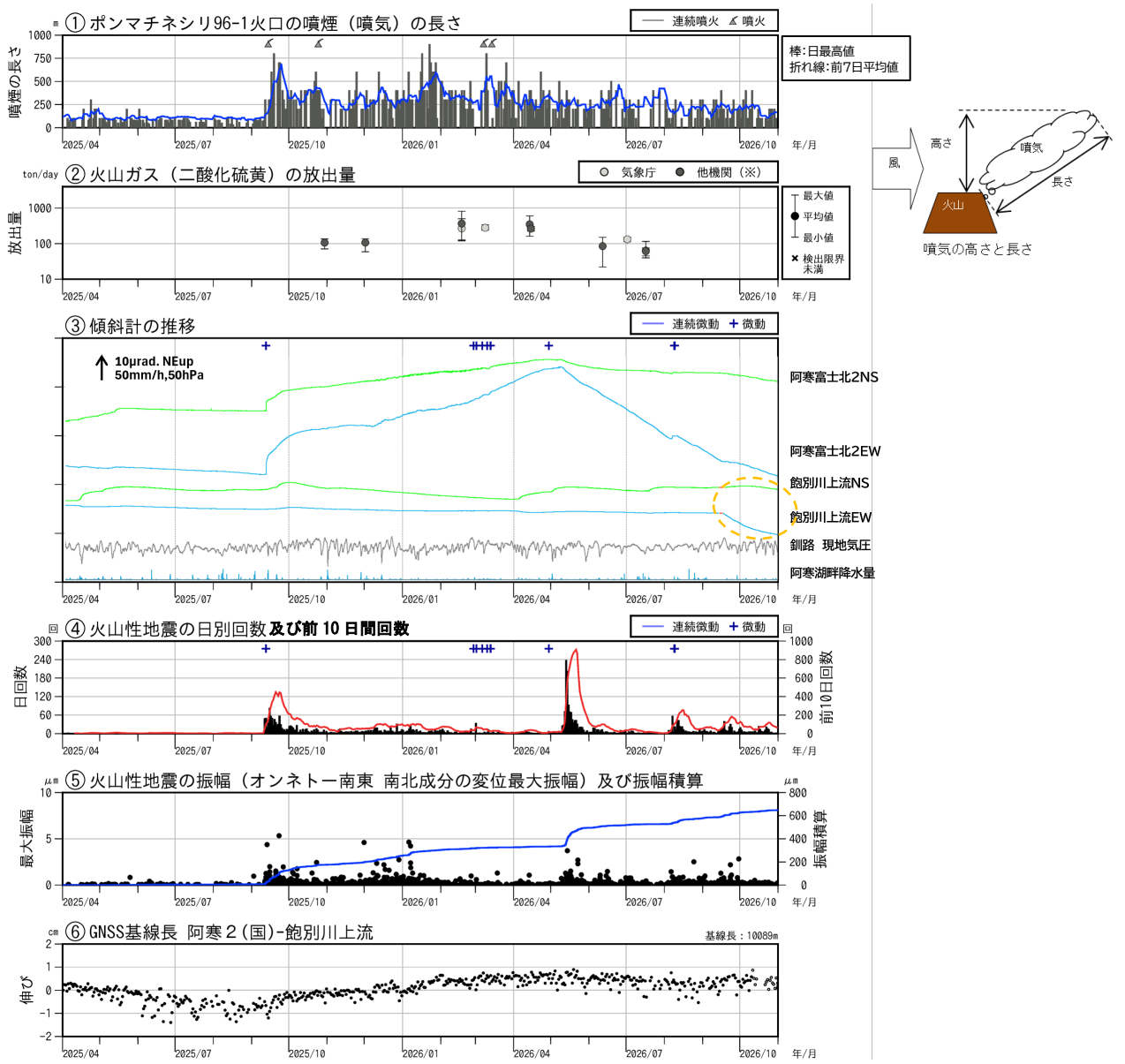


図２　雌阿寒岳　短期の火山活動経過図（2025年４月～2026年10月）

・①の噴気の長さについては右の説明図を参照ください。
・②の他機関（※）は、北海道大学及び機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・防災科学技術研究所）の観測結果を示します。
・③の傾斜計データには、降水や融雪、気圧変動の影響と考えられる変動が含まれています。また、飽別川上流の直近の変化（黄破線内）は、傾斜計の機器交換を行った影響です。
・2025年９月の噴火は、９月12日から15日の間に発生したと考えられます。
・期間内に発生した火山性地震はポンマチネシリ火口付近の浅部で発生したものが多数を占めます（図４参照）。
・グラフ⑥は、GNSS連続観測の基線図（図８）基線⑨に対応しています。白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

・ポンマチネシリ96-1火口の噴煙活動は、2025年９月12日に噴煙量が増加して以降、活発に推移していましたが、５月頃から噴煙量がやや減少するなど、緩やかに低下がみられています（①）。
・2025年９月12日の火山性微動以降、阿寒富士北２観測点で浅部膨張を示すポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が継続しましたが、５月以降は火口方向下がりの変化に転じており、その後は明瞭な活発化を示唆するような特段の変化は認められていません（③）。
・ポンマチネシリ火口付近の地震活動は、2025年９月に活発となり、それ以降も2026年５月中旬に回数が増加するなど時折活発化が認められましたが、６月頃から低下傾向が認められ、10月以降は低調に経過しています（④⑤）。
・東側山麓の観測点によるGNSS基線では、2025年８月末以降、伸びが認められましたが、４月末頃から鈍化し、以降、特段の変化は認められていません（⑥）。

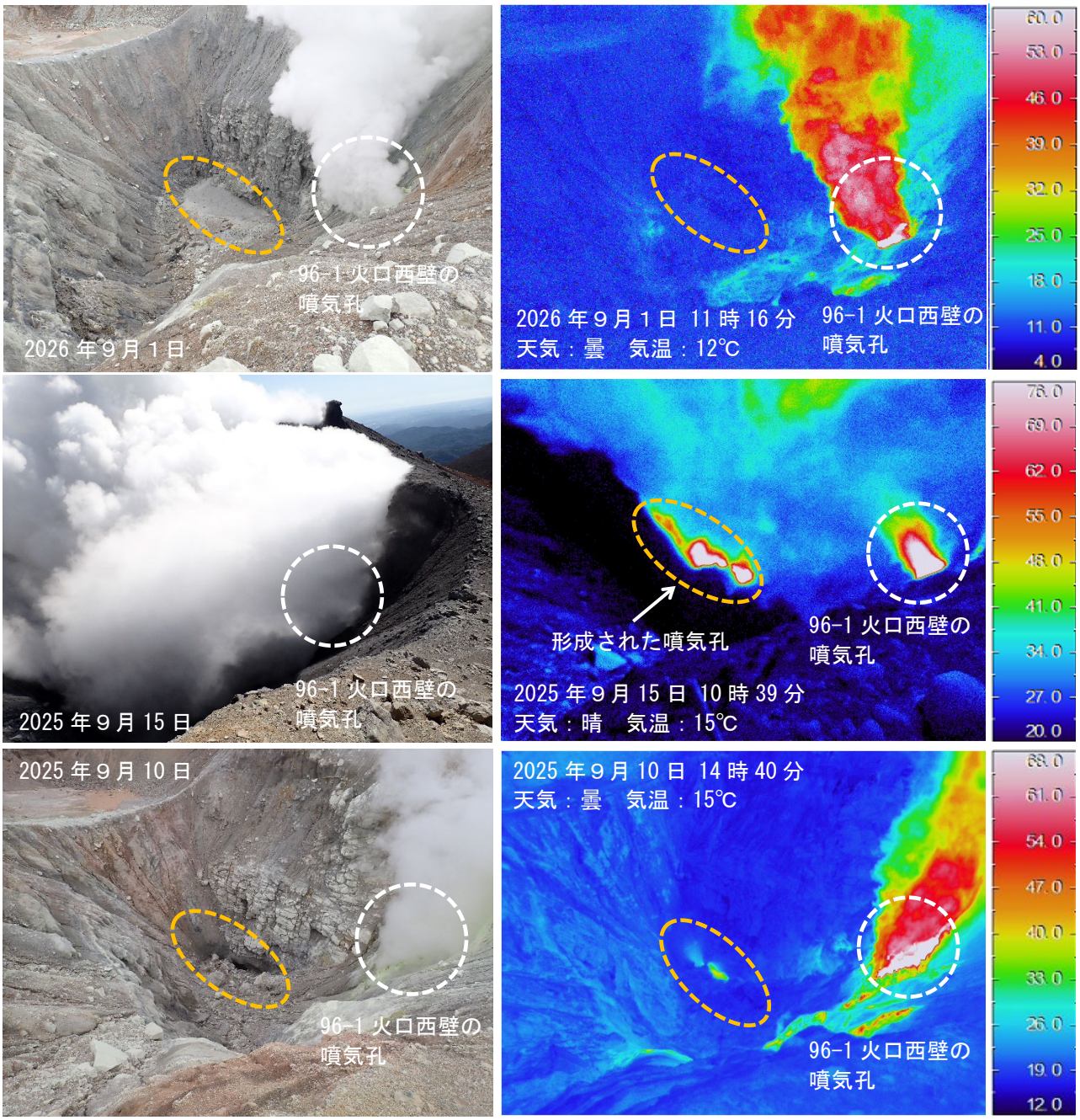


図３　雌阿寒岳　赤外熱映像装置によるポンマチネシリ 96-1 火口の地表面温度分布
上：図１の①から撮影、中：図１の②から撮影、下：図１の①から撮影

・2025 年９月 15 日の現地調査では、2025 年９月 10 日の調査時と比べて西壁の噴気活動（白破線）が明瞭に活発化していたほか、火口底からも活発な噴気活動（黄破線）が認められていました。
・2026 年９月１日に実施した現地調査では、火口底の噴気は認められなくなっており、96-1 火口の噴気（噴煙）活動に衰退が認められました。一方、火口内の西壁からは活発な噴気活動（白破線）が継続していました。

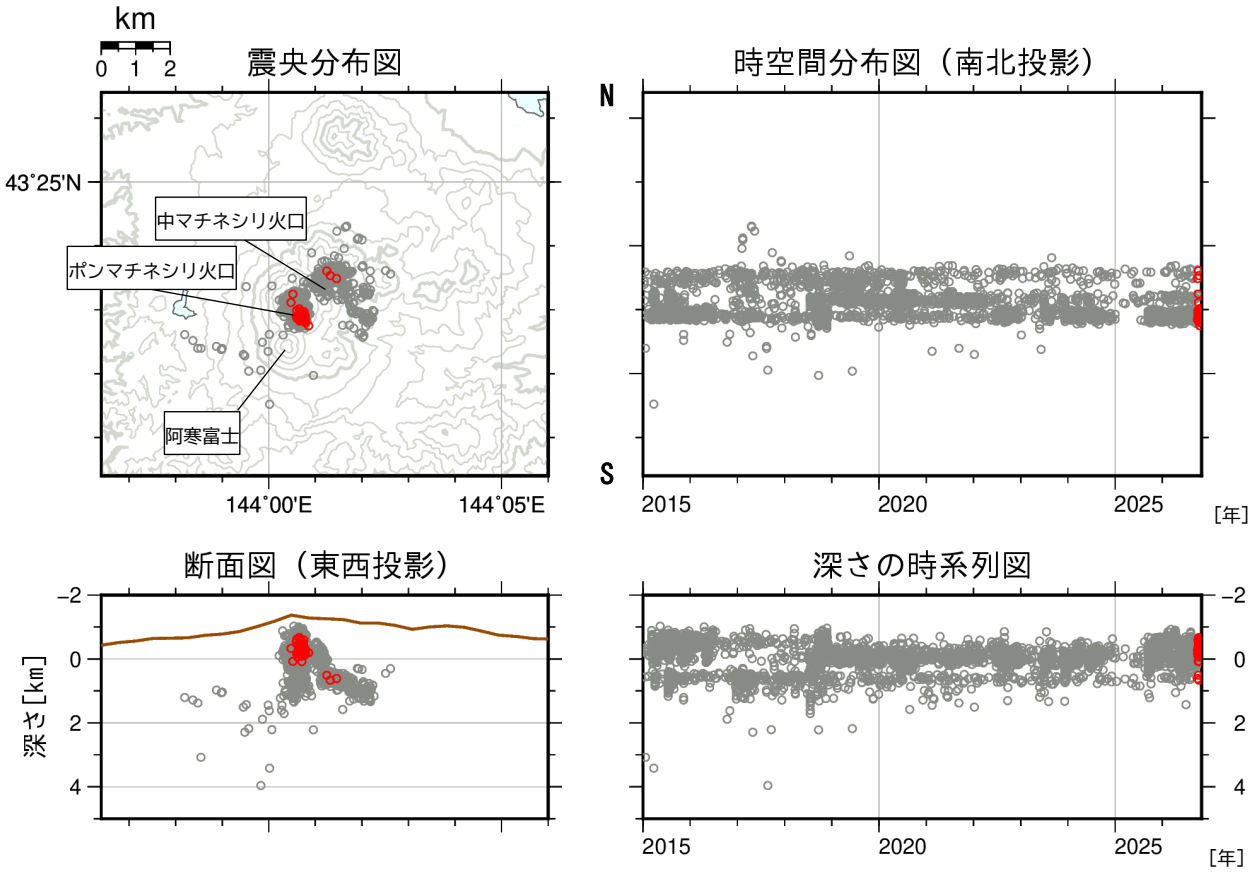


図４　雌阿寒岳　火山性地震の震源分布（2015年１月～2026年10月）
○：2015年１月～2026年９月の震源　○：2026年10月の震源

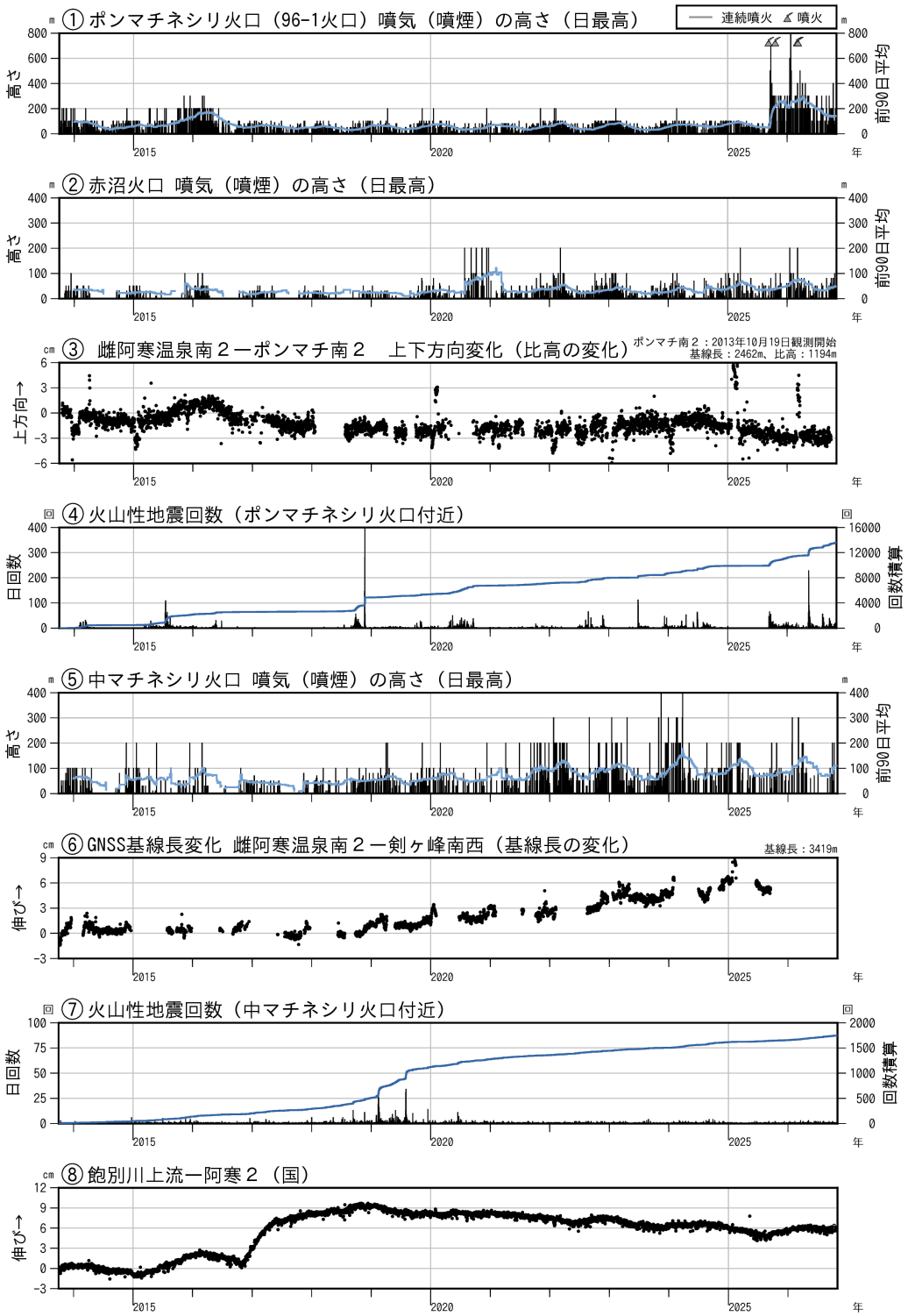


図５　雌阿寒岳　火口別の活動経過図（2013年10月～2026年10月）

・各火口の位置は図１を参照してください。
・グラフ③、⑥、⑧は、それぞれGNSS連続観測の基線図（図８）基線④、⑦、⑨に対応しています。グラフ③、⑥の直近の空白部分は欠測を示します。
・グラフ④、⑦の回数は、雌阿寒岳付近で発生したと計数した地震のうち、発生領域が明瞭に識別出来たもののみを計数しています。

・ポンマチネシリ火口付近では、2025年９月以降、活発な噴煙活動が継続していましたが、５月頃から噴煙量がやや減少するなど、緩やかに低下がみられています。また、同火口付近の火山性地震は、６月頃から低下傾向が認められ、10月以降は低調に推移しています。
・中マチネシリ火口付近の活動状況を示唆する観測データに特段の変化は認められていません。

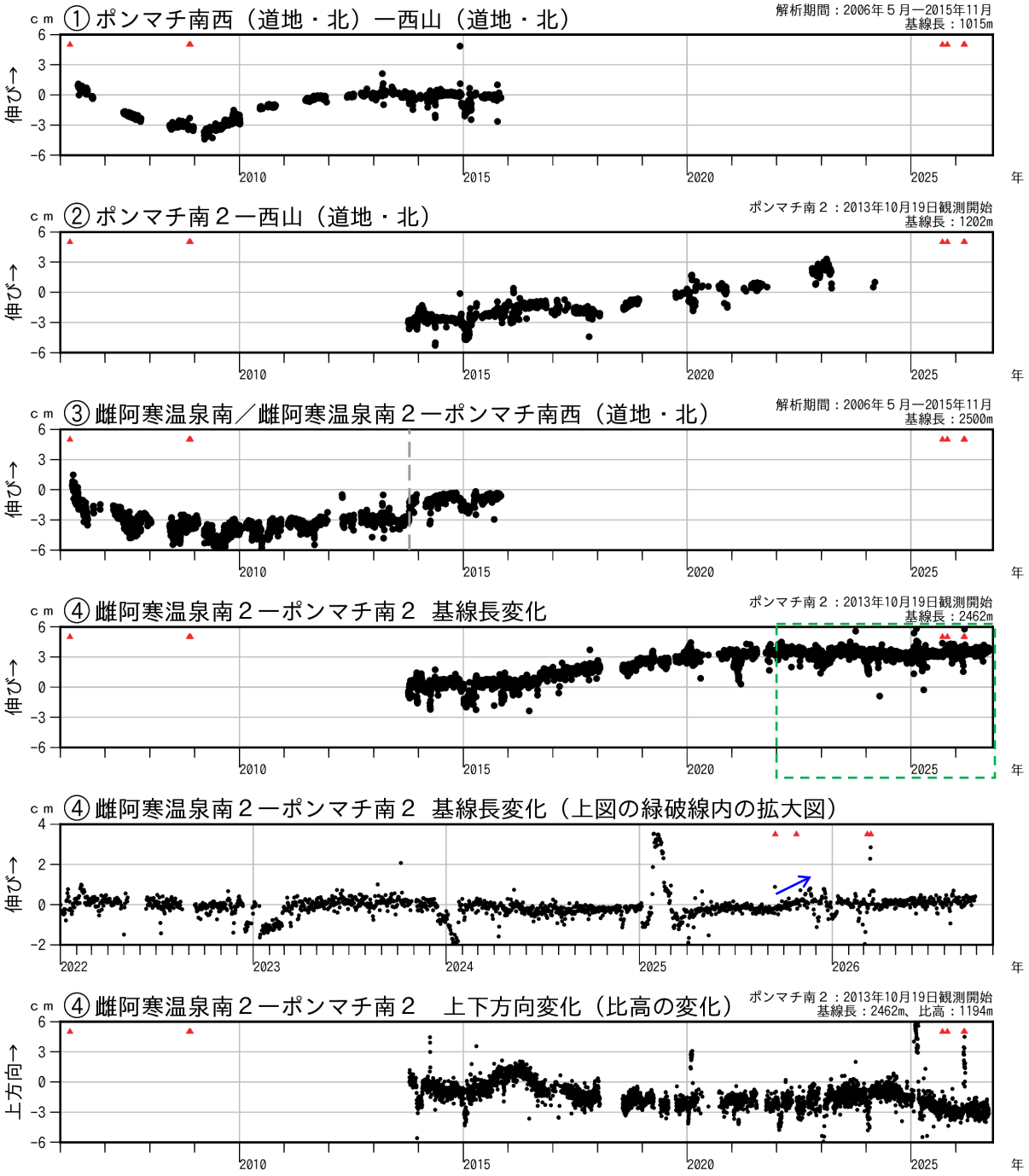


図6-1　雌阿寒岳　GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年４月～2026年10月）

・グラフ①～④はGNSS連続観測の基線図（図８）の基線①～④に対応しています。
・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南２はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線②は①、基線④（基線長）は③と類似した推移を観測していると考えられます。
・基線③の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南２に観測点を移設しています。
・グラフ④は基線④の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南２からみたポンマチ南２の上下方向の動きを表しています。
・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

・基線④（基線長）では、2025年９月中旬から11月頃にかけてごくわずかな伸長（青矢印）が認められましたが、その後、特段の変化は認められません。

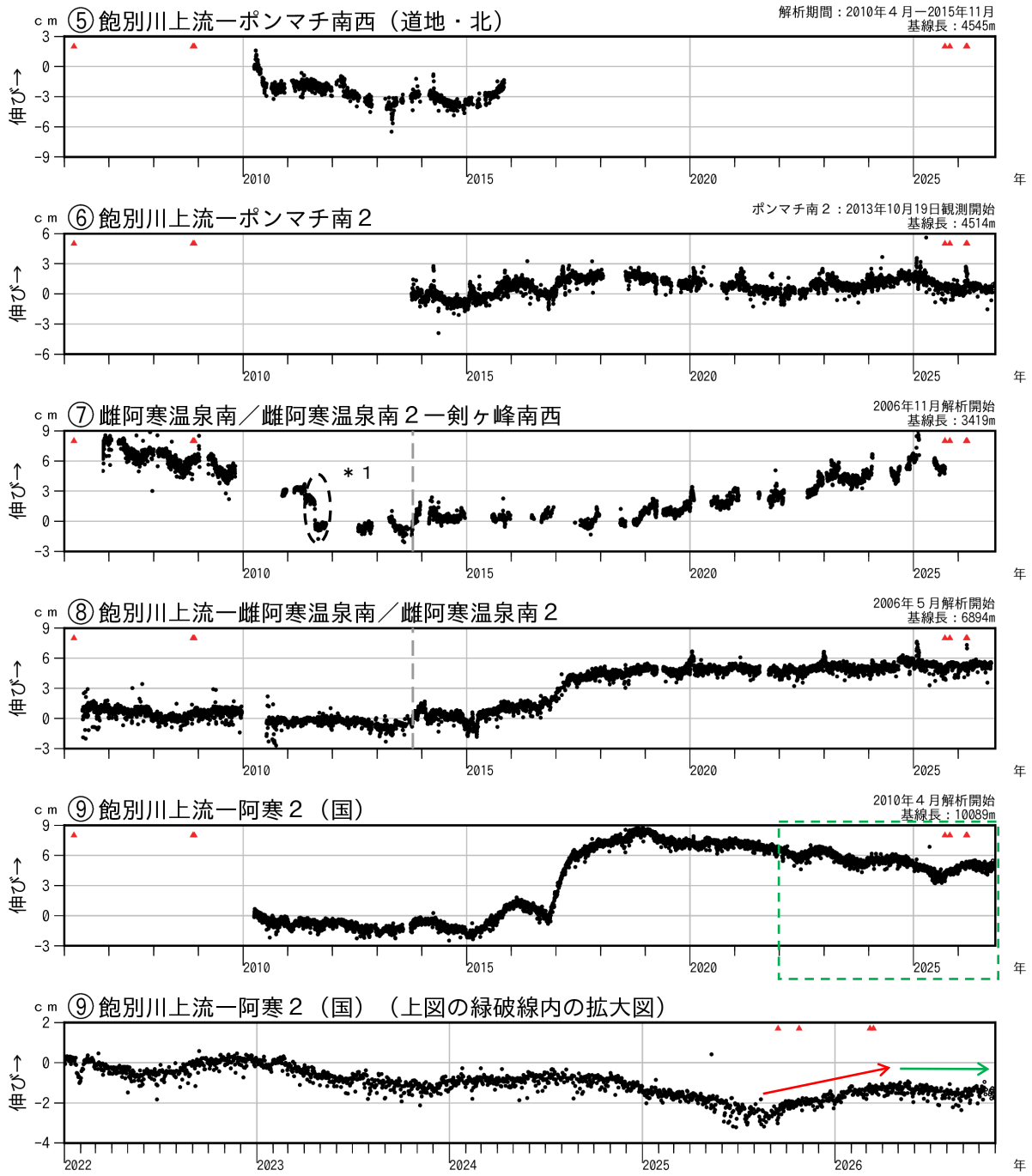


図6-2　雌阿寒岳　GNSS連続観測による基線長の変化（2006年４月～2026年10月）

・グラフ⑤～⑨はGNSS連続観測の基線図（図８）の基線⑤～⑨に対応しています。
・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
・＊１：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。
・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南２はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線⑥は⑤と類似した推移を観測していると考えられます。
・基線⑦⑧の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南２に観測点を移設しています。
・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
・白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

・東側山麓の観測点による基線⑨では、2025年８月末以降、山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長（赤矢印）が観測されていますが、４月末頃から鈍化し、概ね停滞しています（緑矢印）。
・基線⑦では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長傾向が認められます。

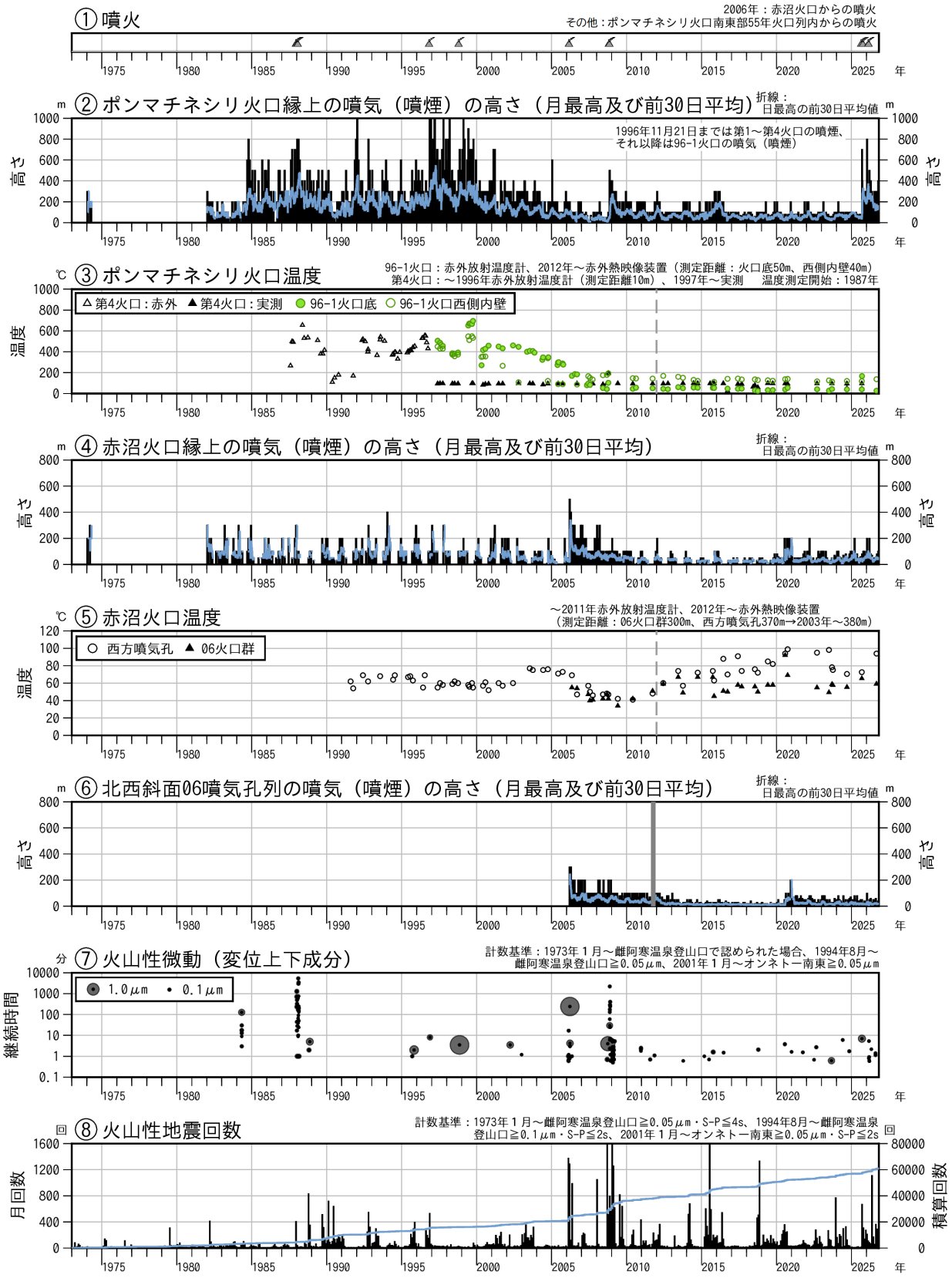


図７　雌阿寒岳　火山活動経過図（1973年１月～2026年10月）

・③：各火口温度は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
・③⑤：測定機器の変更により、2012年（破線）前後では測定温度に差が生じている可能性があります。
・⑥：灰色部分は機器障害による欠測を示します。
・各火口の位置は図１を参照してください。

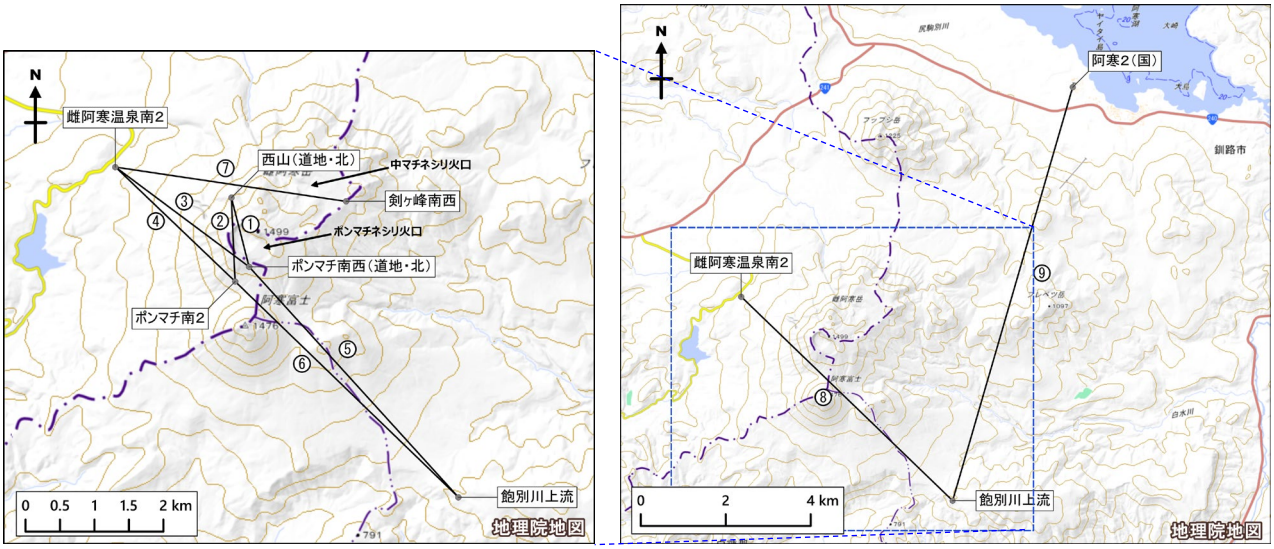
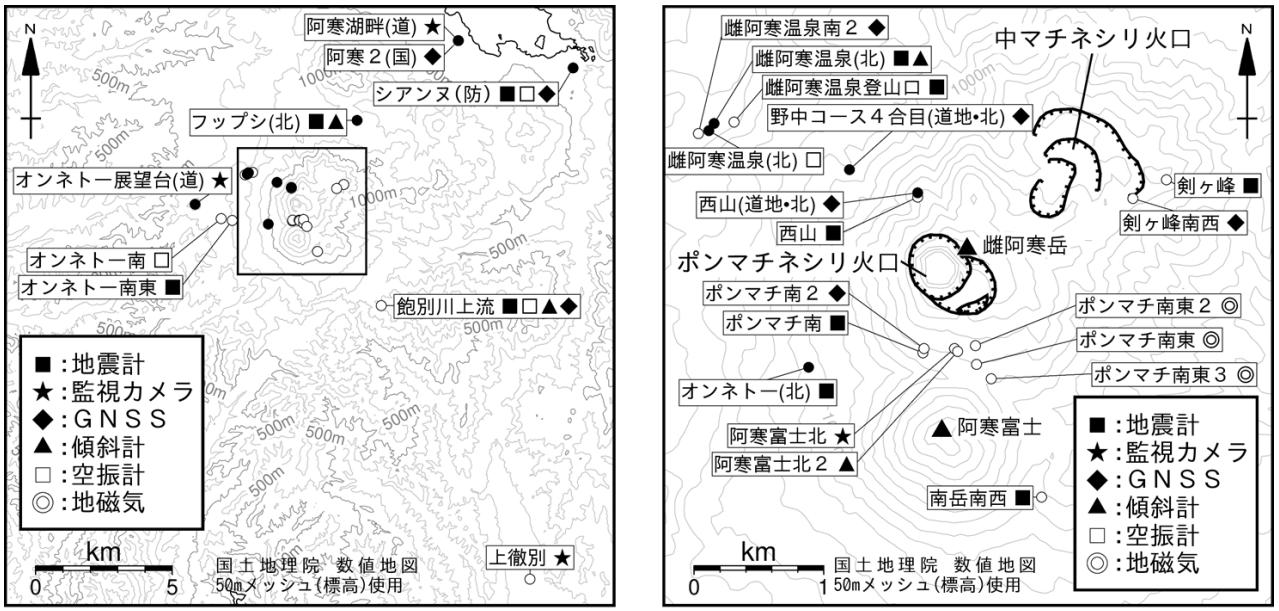


図８　雌阿寒岳　GNSS連続観測の基線図

・基線①～⑨は、図６のグラフ①～⑨に対応します。
・基線⑨は、図２のグラフ⑥に対応しています。
・基線④、⑦、⑨は、それぞれ図５のグラフ③、⑥、⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。左図中の四角囲みは右図の表示範囲を示します。
(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道、
(道地):地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所

図９　雌阿寒岳　観測点配置図